

「原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究」の完成報告

釈尊伝研究会代表 森章司 (2019.11.16)

はじめに

本日の報告会は「**研究完成報告会**」と銘打たせていただいております。もとよりこのような研究に「完成」というものはありえません。研究は永遠に続けなければならないものと自覚しております。しかし敢えて「完成」といたしましたのは、研究代表者としての私がいよいよ老いぼれて参りましたので、このままズルズルと続けていると未完のままで終わってしまうのではないかとという危惧がございまして、少々無理筋ではございますが、今までやってきた研究の成果を「**年表**」と「**総覧**」という形にまとめ、これを公にさせていただきましてわれわれの**研究の総決算**としたいという意味でございます。

「年表」と申しますのは、皆さまにさし上げました「**釈尊および釈尊教団形成史年表**」のことでありまして、「総覧」と申しますのはここに積み上げてございます「**釈尊の生涯にそって配列した事績別原始仏教聖典総覧**」のことでございます。封筒の中には「年表」冊子版と一緒に**CD-ROM**が入っております。どうぞご確認ください。その**CD-ROM**がこの「総覧」の電子データでございまして、それを印刷・製本いたしましたものが、これでございます。A4版で2,065ページになります。皆さんがその**CD-ROM**をプリントいただきまして、このように製本していただきますと、これと全く同じものを作ることができます。またこの**CD-ROM**のなかには「年表」の電子データも入っておりますので、「年表」「総覧」ともに、パソコン内で検索するなどのご利用ができます。

そしてこれらの発行日は**2019年11月16日**、すなわち本日ということになっております。著者は私たち釈尊伝研究会、発行者は本日の報告会を催していただいております、先ほどご挨拶いただきました中央学術研究所の川本貢市所長でございます。

なお当初は、「年表」と「CD」は、ご希望の方に実費でお買い求めいただくと考えておりましたが、研究所のご配慮で無料で配布できるようになりました。まことにありがとうございます。

釈尊伝研究会の歴史

ところでわれわれのこの研究は**平成4年**から始まりました。そして**令和元年**すなわち**平成**で申しますと**平成31年**に終るということになります。すなわち平成の31年間のうちの**28年間**、いわばわれわれの研究は**平成とともに始まり、平成とともに終る**と言ってよいと思います。

この間この研究は、宗教団体**立正佼成会**の**附置研究所**である中央学術研究所の委託研究として進められてきました。研究所内に私たちのために研究室を作ってください、コンピュータを備え、必要な書籍を買っていただき、3度のほぼ1ヵ月に亘るインド調査をさせていただき、その間専任の嘱託研究補助者や大学院生のアルバイトを雇っていただき、私たちには研究費を支給していただきました。そして「**モノグラフ**」と呼んでおります研究報告書を**23冊**出版していただきました。向こうに積みあげてあるのがそれでございます。以上の費用総額がどのくらいになるのか私たちは存じ上げませんが、おそらく**数億円**に上るのではないかと思います。そしてこの間研究所は私たちの希望をすべて文字通り**100%満た**していただきました。ああせい、こうせいという要求を一度も受けたことはございません。この28年間、私たちがやりたいことをやりたいようにやらせていただきました。誠に幸せな時間でありました。

このような物・心両面からのご支援をいただきましたおかげで、この研究は完成を迎えられたわけでございます。私たちは中央学術研究所や立正佼成会のある杉並の方に足を向けて寝られません。**庭野会長先生**や**川端理事長先生**、ならびに中央学術研究所の**所長先生**を始め、一般会員の皆さんに至るまで衷心からの御礼を申し上げます。まことにありがとうございました。

この研究の成果

前置きが長くなってしまいました。本題に入らせていただきます。

私どもといたしますれば、この研究の成果として**あれもこれもとたくさんのことを売り込みたい**のはやまやまでございますが、**仏教者らしく慎み深く謙虚に**ですね、ただ1つのことだけを売り込ませていただきたいと思います。

それは、仏教の開祖とされている**お釈迦さま**すなわち**釈尊**の、本当に伝記といえるような伝記は、洋の東西にわたり、また**2,500年におよぶ仏教の全歴史**において**1冊も存在しなかったのに、今ここにそれを発表できるようになった**ということでございます。要するに釈尊の生涯がどんなであったのかよくわからなかったのです。イエス・キリストやムハンマドには信頼される伝記があるのに、お釈迦さま＝釈尊の全生涯を描いた伝記はありませんでした。だから釈尊は**歴史上に実在した人物ではない**という学説すらございました。しかし今、ここに「年表」と「総覧」という形で釈尊の生涯が明らかになったということでございます。

と申し上げても、**まさかそんなことはなかろう**とお考えになる方も多かろうと思います。仏教にお詳しい方でも、意外にこの事実をご認識になっていない方が多いようですので、少し詳しくご説明申し上げます。

こんなところに引き合いに出すのはたいへん申し訳ないのですが、やむを得ませんので失礼を顧みず申し上げます。日本国内に留まらず全世界で現在もっとも権威のある釈尊の伝記は、中村元先生の『**ゴータマ・ブッダ**』という書物であるということは皆さんもお認めになると思います。この最初は法蔵館という出版社から昭和33年6月20日に出版されました『**ゴータマ・ブッダ（釈尊伝）**』という書物に淵源します。スクリーンに映っているのがこの本でございます。

これに大幅に加筆して『中村元選集 [決定版]』合計43巻のなかの、第11巻と第12巻として収録されました『**ゴータマ・ブッダ**』I・IIの2冊、これ（**現物を示す**）が世界でもっとも権威のある釈尊の伝記でございます。

中村元先生と水野弘元先生の釈尊伝

ところがです。ここからが失礼になるのですが、この第1巻・全**776ページ**の中で、**多少とも年代記（編年史 chronicle）的な視点**で書かれているのは、第1編「誕生・さとり・説法」の第1章「誕生」（31ページ）から第6章の「2、故郷へ帰る」（671ページ）まででございます。といっても640ページにも上りますから、第1巻のほとんどすべてとって過言ではございません。

「故郷へ帰る」というのは、釈尊が菩提樹の根方で悟りを開かれてブッダとなられてから、初めて生れ故郷のシャカ国のカピラヴァットゥに帰られるというシーンをさしております。

中村先生はこの年を「**釈尊が故郷シャカ族の国へ帰ったのは、成道第2年、第6年、第12年などの種々の伝説があり、確定した伝えはない**」（642ページ）と書いておられるだけです。要するにそれが成道何年であったか、釈尊の何歳の時であったか、ことさらに追求しておられないわけでございます。

それどころか、この文章は中村先生の少しばかり先輩に当たられる、**水野弘元**というこれまた偉

大な仏教学者であられた方が表わされた、春秋社から1960年7月5日に発行されました『釈尊の生涯（増補版）』の203ページに書かれている文章を引用されたものにすぎません。中村先生は『ゴータマ・ブッダ』を著されるときに、年代記的な関心はあまりお持ちでなかったのではないかと思います。というよりもおそらく中村先生は、釈尊の伝記を年代記的に書くことは不可能だと判断されて、そのような意図を最初から放棄され、覚りとか教えの内容などを文献学的に厳密に研究することに主眼を置かれたのではないかと思います。

その証拠に「決定版」では、「釈尊伝」という副題は外されております。

そして中村先生の『ゴータマ・ブッダ』では、次に多少とも年代記的な視点で書かれた部分が現れるのは、第Ⅱ巻の冒頭の3ページ「第Ⅱ編 最後の旅」でございます。そしてこれに関連する記述が延々と447ページまで続きます。第2巻の総ページは506ページですから、これは第2巻のほとんどすべてとってよいでしょう。

そしてこの最後の旅の年代について先生は、「ゴータマ・ブッダは、齢80にして、当時最大の強国であったマガダ国の首都ラージャガハ（王舎城）の東北方にある〈鷲の峰〉（漢訳仏典では靈鷲山）を出て、生れ故郷に向って旅に出た」（22ページ）と書かれておりますから、これは釈尊が80歳で亡くなったまさしくその年のことであったということになります。

中村先生の『ゴータマ・ブッダ』は、「故郷へ帰る」は釈尊が悟りを開いてブッダになったことに関連して述べられているわけでありまして、「最後の旅」はその釈尊が亡くなることに関連して述べられているわけでありまして、中村先生の『ゴータマ・ブッダ』は2巻併せると、全部で1,282ページ（776+506）という大部な書物であります。実はここには釈尊が悟りを開いてブッダになった、まさしくブッダとしての釈尊の最初の事績と、釈尊が亡くなるブッダとしての最後の事績しか取り上げられていないのです。釈尊はブッダとして35歳から80歳まで、45年間の活動をされましたが、釈尊が故郷に帰られたのが成道5年と仮定いたしますと、40歳から79歳までの40年間については全くふれられていないわけでございます。

これに対して水野先生の『釈尊の生涯』は、先の「仏の釈迦国訪問については、成道第2年説、第6年説、第12年説その他のものがあって、定説がない」という文章に続いて、「釈尊がもし成道5年ごろに故郷を訪問され、その時にアーナンダなどが出家したとすれば、成道第5年は釈尊の40歳の時であり、アーナンダがこのとき20歳であったとすれば、両者の年齢の相違は20年となる。……」などと書かれていますから（204ページ）、水野先生には多少とも年代史的な関心がお有りになったのではないかと、と思います。ちなみにわれわれは釈尊が故郷へ帰られたのは、成道14年と考えております。

しかしその水野先生の『釈尊の生涯』にいたしましても、中村先生同様に、第16章の「故郷釈迦国の訪問」までは年代記的な視点で書かれておりますが、次に年代記的な視点で書かれた部分が現れるのは、中村先生と同様に、第22章の「最後の遊歴」でございます。この間に祇園精舎の建設やコーサラ国の教化、デーヴァダッタの反逆などが取り上げられていますが、これらはトピックとして取り上げられているだけであって、釈尊の年代史の中のどこに位置づけされるかという視点でないのは、中村先生と同じでございます。水野先生のご著書も、釈尊の40歳から79歳までについては年代記的には空白であるわけでございます。

ですから日本を代表する仏教学者が書かれた、世界でもっとも権威のある「釈尊伝」では、釈尊

の覚りから、一気に釈尊が亡くなるまでジャンプして、その間の40年にわたる釈尊の活動が年代記的に記されるということはないわけでございます。失礼な言い方ですが、これでは「釈尊伝」とは申せません。仏教学の方面では日本の学界は世界の最高峰にありますから、世界中のどこを探しても釈尊の完全な伝記は今までに存在しなかったということになります。

仏教聖典の不思議

なぜこんな不思議なことになってしまったのでしょうか。実は事情はびっくりするほど簡単なのです。

釈尊の行状を伝えるお経は約10,000経くらいございます。それが**原始仏教聖典**と呼ばれるものでございます。中には文庫本1冊になるような長いお経もありますが、半分以上は5、6ページのごく短いお経です。しかしこれらにも必ず釈尊が「どこで」「誰に」「どのようなシチュエーション」で「何を」し、「どのような教え」を説かれて、「どうなった」ということは明確に記されています。しかし不思議なことにそれが「いつ」のことであったのかは示されておりません、かろうじてぼんやりと「あるとき」とか「その時」とだけしか記されていないのです。日本のおとぎ話は「昔々、あるところにお爺さんとお婆さんがおりました」というように語り出されるのが普通ですから、**年代も、場所も、人物も**特定されていないわけですが、お経では「あるところ」ではなくきちんと場所も示されているし、「お爺さんお婆さん」ではなく、どこの何某という人物名も特定されているわけでございます。しかるに不思議なことに「時」だけは特定されていないわけでございます。

ブックサーティ

例えば次の通りでございます。「年表」の**49ページ**をお開きください。小さな文字ですから、お見えにならない方もいらっしゃると思いますが、ここには左上に**46.102**という数字が示しており、その後には

【釈尊】マガダ国を遊行してラージャガハのバグガヴァという陶師の家に比丘ブックサーティと同宿する（ブックサーティははじめ同宿したのが釈尊であると知らなかった）。としてございます。

スクリーンをご覧ください。この**46.102**という数字の、整数部分の**46**は釈尊の年齢を表わしています。

釈尊の年齢は仏教の伝統では、赤ん坊としての釈尊がお母さんの胎内に入るところ、すなわちお母さんのお腹の中で卵子と精子が結合した瞬間を誕生日として数えられます。すなわち人間の一生は受胎の瞬間から始まるわけでございます。ですから仏教の戒律ではお坊さんが墮胎手術をほどこすと殺人罪として処罰されます。

しかし普通の人間には受胎の瞬間がいつかなどわかりませんから、便宜的にはお母さんのお腹の中からオギャーと生れたときから数えられます。この「年表」ではこの便宜的な年齢の数え方によっております。また釈尊当時のインドでは年齢の数え方には、満年齢と数え年年齢の両方が行われておりました。しかし仏教の教団内では満年齢が基本でした。正規のお坊さんになる資格が生じるのは、オギャーと生れた日を誕生日とする満20歳でございます。しかし本来の人間の一生は受胎した瞬間から始まるのですから、「受胎から始まる誕生日から数えてよい」とされています。

また小数点以下の第1位は季節を表わします。0.1は雨季前で、0.2は雨季中、0.3は雨季の後を表わします。インドでは1年を**酷暑季**（とても暑い季節）と**雨季**（雨の季節）と**寒季**（寒い季節）

の3つの季節に分かちますが、0.1はこの酷暑季、0.2は雨季、0.3は寒季にあたります。要するにこの「年表」では1年を、雨の季節すなわち雨季を中心としてその前・後の3季に分けているわけでございます。そして小数点第2位以下は事績の発生順を表わします。

また「年表」の記事は、**釈尊**と、**教団**と、**出家修行者**と、**在家者**と、**社会一般**と、**他宗教**の6つの種類に分けて、これを3つの欄に分けて記入してございます。

49ページで申しますと、46.102が記入してあるのが釈尊の欄で、46.103と46.104が記入してあるのが教団と出家修行者の欄、46.105が記入してあるのが在家者と社会一般と他宗教の欄でございます。

したがいまして**46.102**は、釈尊の**満46歳の年の、雨季前の、第2番目の事績**ということを表わしています。

総覧

しかし「年表」の

〔釈尊〕 マガダ国を遊行してラージャガハのバツガヴァという陶師の家に比丘ブックサーティと同宿する（ブックサーティははじめ同宿したのが釈尊であると知らなかった）。

だけでは具体的な内容はおわかりにならないと思います。そういうときには「総覧」の**46.102**（p.435）の所をご覧ください。お配りさせていただきましたCD-ROMをパソコンで開いていただきまして、46.102を検索いたしますと、こういう画面が現れます。

ここには【A文献】〈当該経〉として

MN.140 Dhātuviḅhaṅga-s.（界分別経 vol.III p.237、南伝11下 p.332）

『中阿含』162「分別六界経」（大正01 p.690上、国訳06 p.048）

という2つの文献が上げてございます。

そして【B文献】として

MN.-A.（vol.V p.033）

という文献が上げてございます。

「A文献」というのは原始仏教聖典ということを表わします。「B文献」というのは、この原始仏教聖典を元にして後の時代にインドやスリランカなどで註釈された第2次文献でございます。

そしてここには【C文献】の紹介がありませんが、例えば次の事績**46.103**にはありまして、ここには

Bigandet（vol.I p.163、赤沼 p.210）

という文献があげてございます。この「C文献」というのはさらに後に、タイとかマンミャーとか中国などで作られた文献をいいます。

本日は時間がございませんので、*MN.*など**文献の解説**は省略させていただきます。申し訳ございませんが、「年表」の前書きのところをご参照いただきたいと思います。

「総覧」の元の所に戻りまして、*MN.140 Dhātuviḅhaṅga-s.*（界分別経）に記されている内容を見てみたいと思います。ここには、

あるとき世尊はマガダ国を遊行して王舎城に入り、バツガヴァという陶師の家に赴いて、「一夜をここで過ごさせてほしい」と依頼された。陶師は「先に止宿している出家者が許せばどうぞ」と言った。出家者とは世尊を師と仰いで出家したブックサーティであったが、彼は世尊とは面識がなかった。世尊は彼が自分を師と仰いで出家したことを知られて六界分別の教えを説かれた。そのときブックサーティは自分に法を説いた人が世尊その人であることを知って、

世尊に「友よ」と呼びかけたことを謝り、世尊のもとで具足戒を受けたいと願い出た。しかし世尊は、「比丘よ、如来たちは衣や托鉢の鉢を持っていない者には具足戒を与えない」と許されなかった。彼は外に出て、衣鉢を求めて歩いているとき迷走する牝牛につかれて死んだ。

としてございます。

これは要約したものでございまして、元の典籍にはもっと具体的にリアルに書かれてございます。ところがここには、「あるとき世尊はマガダ国を遊行して……」と、「あるとき」としかしておりません。ですからこれではこれが釈尊の若いときのことなのか、壮年になってからのことなのか、あるいは晩年のことなのか、わかりません。

このような形で記されたお経が1万もあり、そのすべてがこうなのですから、いわば細かなことが記されている日記帳があるのだけれど、それがバラバラになってしまっていて、しかもその日付のところだけがなぜだかなくなってしまっているようなものなのです。

ですから中村先生も、水野先生も、世界中のどんな学者でも、釈尊の生涯中にどんなトピックがあったのかを知ることは容易なのですが、それを年代記として年月日順に並べ替えることができなかったのです。しかし釈尊が悟りを開かれたことを主題とするお経や、釈尊が亡くなったことを主題とするお経は、自ずからにその時期が知られますし、これらは長いお経で、いくつかのトピックが順を追って記述されておりますから、水野先生も、中村先生もこの部分だけは年代記風な記述ができたわけでございます。

「あるとき」推定の実例

しかし私たちは10,000にも上るこのようなお経の「あるとき」「その時」を、例えばこのお経でいえば釈尊の46歳の雨季前のことであったと読み解くことができたので、「年表」を作ることができたわけでございます。

どのように読み解いたかを簡単に申し上げます。ここには釈尊がマガダ国を遊行して、王舎城のブクサーティという陶器づくりの家に、ブクサーティというお坊さんと同宿した、しかしブクサーティは釈尊を師と仰いで出家したにかかわらず、面識がなかったとされています。

釈尊の教団では、お坊さんになることを具足戒を授けられると申しますが、この具足戒を授けられる方法には2つしかございません。1つは、釈尊自身が「よく来たね、自分の元で修行に励みなさい」と許される「善来比丘具足戒」と、2つめは、10人以上のお坊さんによる面接試験を受けて合格するという「十衆白四羯磨具足戒」という方法でございまして。しかし「十衆白四羯磨具足戒」という入社試験のようなものが制定される前に、「三宝帰依具足戒」という方法でお坊さんになる方法もありました。これはお坊さんになりたいという希望者に、「ブッダに帰依します、ダンマに帰依します。サンガに帰依します」と誓わせればそれでよいというものです。この方法にはいろいろと問題があったため、あしかけ4年間実施されただけで3年後に、「十衆白四羯磨具足戒」が制定されたことによって廃止されました。

ブクサーティが「善来比丘具足戒」で比丘になったのなら、ブッダを知らないことなど考えられません。また10人以上のお坊さんの面接試験を受けるときにはきちんと服装や持ち物のチェックがされますから、衣鉢を持っていなかったなどということは考えられません。とすればブクサーティがお坊さんになったのは「三宝帰依具足戒」が許されていた4年間のことであったということが判ります。またこのとき釈尊は弟子も連れずに1人で旅行されていたようですから、弟子は師匠と朝から晩まで一緒に生活しなければならないという「和尚と弟子」の制度が出来る前のことであったこともわかります。さらに雨季に旅行することは戒律で禁止されておりますから、釈尊が旅行中にブクサーティの家に泊まったのは雨季ではないということになります。

などというさまざまな状況証拠から、われわれはこの事績は釈尊46歳の雨季前のことであったと読み解いたわけでございます。このような1つ1つのお経の年代の推定過程につきましては、「モノグラフ」第19号以下に掲載した「研究ノート」(1)から(17)までに詳しく書いてございますし、「年表」にはその該当箇所をお示ししておきました。今の場合は【研究ノート16】の第【140】節でございます。

まさしく聖典の「ある時」「その時」が具体的には何時であったかを探ることは、推理小説の探偵が、さりげない直接証拠やさまざまな状況証拠を元に犯人を捜し出すのと同じようなものでございまして、私たちは**原始仏教聖典探偵**のようなことをやったわけでございます。

そして非常に大事な状況証拠が先ほどの具足戒のような教団形成史でありまして、私たちは釈尊の生涯と釈尊教団の形成史を重ね合わせることによって、さまざまな年代を導き出したわけでございます。「年表」を『**釈尊および釈尊教団形成史年表**』と称する所以でございます。

念のために「年表」の19ページに掲げておきました「論文・資料集・研究ノート略名一覧」をご覧ください。これをご覧くださいただければ、われわれの研究期間28年のうちの初めの23年間はこの「あるとき」「その時」を読み解くための基礎研究でありまして、先ほどご紹介いたしましたブックサーティが登場する経典が釈尊が何歳のことであったかなどを推理する作業は最近の5年間にやったに過ぎないことがお分かりいただけると思います。

釈尊のブッダとしての活動のど真ん中の事績(1)

このような能書きばかりたれていてもしかたありません。そこで中村先生も、水野先生も空白のままに放置されている、釈尊が35歳でブッダとなられ、80歳で入滅されるまでの45年間のちょうど**真ん中**は、**成道22年、23年の釈尊56歳、57歳**の時でありますので、「年表」と「総覧」を元に、このあたりの主な釈尊の活動を見てみたいと思います。

「年表」の70ページをご覧ください。

釈尊56歳の最初の記事は、ページ中段あたりに太い線がございしますが、そのすぐ下でございます。ここには

56.101 (2/15) [釈尊] 出胎を誕生とする満56歳の誕生日
としてございます。

先に申し上げましたように、56.101の56は釈尊の満年齢56歳を表わします。そして0.1は雨季前を表わし、最後の01はこの季節の第1番目の事績を表わします。また括弧の中の2/15は2月15日を表わします。これはお釈迦さまの誕生日でございます。ただしこれは旧暦の2月15日であり、また釈尊の時代から現在までの2,500年ほどの間に天文学的という歳差現象が1月ほどありますので、これに2ヵ月半ほど足していただくと、現代の私たちの季節感覚に近くなります。2月15日は今の4月下旬から5月上旬にあたります。

そして次には、

56.102 [釈尊] マドゥラー地方に遊行するが飢饉であったためマドゥラーにおいて雨安居に入ることができず、引き返してサーヴァッティに行こうとする。

という記事が続きます。「年表」では人名は太字で表わし、地名には下線が付けてございます。したがってマドゥラーとサーヴァッティは地名でございます。

ちょっと地図をご覧ください。レジユメにも地図を入れておきましたが、今はスクリーンをご覧ください。

この画面の左端がマドゥラーでございます。現在はマトゥラーと呼ばれております。仏教ではブツダの像が人間の形として表現されるようになったのは紀元後1世紀頃のことでありまして、その最初がここマトゥラーか、あるいはパキスタンにありますガンダーラか、とされております。

そしてここから500キロほど東にあるここがサーヴァッティでございます。サーヴァッティというのは漢訳語では舍衛城でありまして、この町外れに「平家物語」に「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり、……」とうたわれる祇園精舎がございました。

そして少し先取りいたしまして、このときの釈尊の足取りを説明させていただきます。釈尊はこのときサーヴァッティの方向に向かわれようとしたわけではありますが、雨季に入ってしまったため、やむなく途中のヴェーランジャーという小さな町に3ヵ月の間足止めをくらってしまいました。ここがヴェーランジャーでございます。そして雨季が明けのを待ちかねたように、東のサンカッサを経由されまして、地図では判りにくいのですが、これがガンジス河でございます。ガンジス河の本流に沿って南に下られ、ガンジス河とこれがヤムナー河でございますが、その合流地点にあるパヤーガ・パティッターナという渡し場でガンジス河を渡られ、さらに進んでパーラーナシー、今のベナレスでしばらく滞在された後、今度はガンジス河と今のガンダク河との合流地点で、これがガンダク河でございます。ここを左折されて、ヴェーサーリーという所まで行かれました。ヴェーランジャーからヴェーサーリーまでの道中は約1,000キロでございます。

そして今の釈尊の行動とは関係がないのですが、ついでにちょっと釈尊が活動された地域をご紹介します。このヴェーサーリーのさらに東、これもガンジス河の岸辺にチャンパーという大都会がございました。

また先ほどブックサーティのところに出てまいりましたマガダ国の首都ラージャガハ（王舎城）というのはここでありまして、釈尊の生れ故郷というのはここカピラヴァットゥでございます。上の方に黒く見えますのは、ヒマラヤ山脈の山麓でございます。

また先ほどご紹介いたしました仏像の発祥地のマドゥラーへ行かれる前の年の雨季は、釈尊はここコーサンビーで過ごされました。コーサンビーはヤムナー河という河の岸辺でございますので、釈尊は次の雨季をマドゥラーで過ごそうとされてヤムナー河にそって遡られたわけですが、あいにく飢饉であったためにやむなくヴェーランジャーで雨季を過ごさなければならなくなったわけでございます。

それが、「年表」の

56.201 [釈尊] サーヴァッティに行く途中に雨期となり、やむを得ずヴェーランジャーにおいて成道後第22回目の雨安居（雨期）に入る。その年は大飢饉であったため雨安居中は馬麦を食べる。

でございます。馬麦というのは馬の餌にする麦のことでございます。釈尊の生涯にはこのように馬の餌を食べて飢えを凌がれるということもあったわけでございます。

ところで今ご説明させていただきました、ガンジス河の流域を中心とする地域を**仏教中国**と申します。これはインド亜大陸全体の中ではこの黒くなった部分に当たります。それほど広大な地域ではございませんが、釈尊はこの範囲から一歩も外に出られたことはありません。

このような釈尊時代の地理や釈尊の行動範囲を調べてくれましたのが金子芳夫さんです。金子さんは東洋大学の大学院を卒業して、しばらくは中央学術研究所の研究所員をやっておられました。この研究を中央学術研究所のご支援をいただきまして立ち上げましたのは、金子さんと私の2人でございます。今はこの研究所の非常勤研究員でございます。

このへんでしばらく休憩を取らせていただきたいと思います。と存じます。

失礼いたしました。慌ただしくて十分お休みになれなかったことと思いますが、もう少しご報告したいことが残っておりますので、再開させていただきます。

釈尊のブツダとしての活動のど真ん中の事績 (2)

先ほどの「年表」に戻ります。71 ページをお開きください。最初の記事は、

56.202 [教団] 比丘サーリプッタが波羅提木叉を説くことを勧めるが、釈尊はいまだ時期にあらずと退ける。

となつてございます。

これもこれだけではお分かりにならないと思います。そこで「総覧」の 56.202 の部分（「総覧」p.1174）を見てみたいと思います。

Vinaya Pārājika 001 (波羅夷 vol.III p.007、南伝01 p.011) : [仏在処：ヴェーランジャー]

ときに舍利弗が夕方に独坐より出定して世尊のもとを訪れて、世尊に「どのような仏の梵行が久住するのか」と質問し、世尊は学処・波羅提木叉の制定の必要性を説かれたが、このときには制定されなかった。

という概要が示してございます。

しかしこれでも詳細は知り難いと思いますから、もっと詳しく知るためには、「総覧」には文献名とともにページも示してございますから、元の典籍にあたってご確認いただければと思います。この元の典籍に書かれていることを要約して申し上げますと、

その時、舍利弗が夕方に坐禅から起つて世尊のもとを訪れ、世尊に「どのような仏の修行が未長く存続するのですか」と質問した。世尊は「ヴィパッシン、シキン、ヴェッサブーという過去の仏たちの修行は長くは残らなかったが、カクサンダ、コーナーガマナ、カッサパ仏という過去の仏の修行は久しく残った。長く残らなかったのは、その仏たちが弟子のために波羅提木叉を制定しなかったからであるが、長く残ったのは、その時の仏たちが波羅提木叉を制定したからである」と答えられた。

そこで舍利弗は釈尊にそれでは波羅提木叉を制定してくださいと申し出たが、釈尊は「舍利弗よ、待て。如来は自らその時を知る。如来はサンガに未だ犯罪が起こらない間は波羅提木叉を制定しない。サンガがいまだ大いなる利養を得ない間は犯罪は起こらないであろう」と説かれ、このときには釈尊は波羅提木叉を制定されなかった。

とされています。

すなわち、過去の仏たちにはその教えが長続きした仏もあり、長続きしなかった仏もあって、仏の教えが未長く存続するためには戒律が必要であるが、いまだサンガがそれほど大きく豊かになっていないから、いまだサンガのなかに犯罪が起きていない。しかし大きく豊かになったときには、罪を犯すものが現れるであろう。その時に波羅提木叉を制定しよう、というのです。なかなか意味深長な言葉だと思えます。

このなかにございます波羅提木叉というのは、お坊さんたちの世界には厳しい戒律がございまして、その条文のことでございます。

この戒律は釈尊が「随犯随制」と呼ばれる形で制定されました。随犯随制と申しますのは犯罪が起きたら、その都度その都度、戒律が定められるという意味でございまして。そこで釈尊は、いまだ

犯罪が起きていないから、もう少し待てとサーリプッタを制止されたわけでございます。

そして

56.301に

〔釈尊〕ヴェーランジャーからソーレツヤ、サンカッサ、カンニャクツジャ、パヤーガ・パティッターナ、バーラーナシーを經由してヴェーサーリーに行く。ヴェーサーリーも飢饉であった。

とさせていただきますように、釈尊一行はヴェーランジャーからヴェーサーリーまでの大旅行をされたわけでございます。先ほど申しましたように、この距離はおおよそ1,000kmでございます。

釈尊の遊行期間は原則として2ヵ月間を超えることはありませんでした。1日に歩く距離は平均すると10kmくらいのものでした。午前中は托鉢して正午までには1日1回の食事をしなければなりませんし、午後1時頃に出発したとしても、暗くなると猛獣や盗賊の危険がございますし、それに昼間の時間の長い夏には遊行されませんでしたから、1日に歩ける時間は長くとも3時間くらいしかありません。それに布教教化のために2,3日同じ場所に逗留するということがありますから、平均すると1日10kmくらいの行程にならざるをえないわけでございます。もしこのペースで歩いたとすると、2ヵ月間60日で600kmが限度です。600kmというのはちょうどコーサラ国の首都であった舎衛城と、マガダ国の首都であった王舎城を結ぶ距離でございます。

しかしこのときの遊行は1,000キロでしたから、1日10キロのペースで進んだとすると100日、3ヵ月半ほどかかったはずですが、だいたいヴェーランジャーで雨季を過ごしたのは、飢饉のためにやむを得なかったわけですから、これは釈尊の遊行の中では異例中の異例ということになります。

「年表」では次に、57.102に

〔教団〕ヴェーサーリー近くのカラダ村出身の比丘スディンナ・カラダカプッタが旧妻と不浄を行ったことを因縁として波羅夷罪第1条（淫戒）が制定される。これが波羅提木叉制定の最初であった。

としてございます。

先ほど釈尊は犯罪が起こるまで待てと制止されたわけですが、早速その機会がやってまいりました。

この場面を「総覧」（p.1179）で見ると次のようになっています。

Vinaya Pārāṅgika 001（波羅夷 vol.III p.011、南伝01 p.017）：〔仏在処：ヴェーサーリー大林重閣講堂〕そのときヴェーサーリーの近くにカラダカという村があって、そこにはスディンナ・カラダカプッタという長者の子がいた。彼は世尊の説法を聞いて世尊のもとで出家して具足戒を得、頭陀行を行じ、あるヴァッヅ族の村の近くに住した。

そのときヴァッヅ国は飢饉で食を得難かったので、カラダカ村で乞食しながら自分の父親の家に行き、懇請されて後嗣を作るために旧妻と不浄行を行じた。世尊は「不浄行を行ぜば波羅夷にして共住すべからず」と、波羅夷罪第1条を制定された。

となっています。不浄行というのは男女の性行為のことでございます。波羅夷というのは教団追放という最も重い罰が科せられる罪でございます。

このように戒律は「随犯随制」されたわけでございます。釈尊の45年間の活動のちょうど真ん中に当たる年は、ガンジス河流域一帯はたいへんな飢饉であったようでございます。もし現代のように、気象記録がきちりと残されているとすれば、これが紀元前何年のことであるか分かったと思います。

次は、「年表」の72ページをご覧ください。左上の方に、

57.201 [釈尊] ヴェーサーリーにおいて成道後第23回目の雨安居（雨期）に入る。

とございます。

該当箇所「総覧」（p.1180）をご紹介します。

Vinaya Pārājika 004 (波羅夷 vol.III p.087、南伝 01 p.144) : そのとき、世尊はヴェーサーリーの大林重閣講堂におられた。そのとき、衆多の知識親友比丘はヴァググムダー河畔で雨安居に入った。世尊に会うために到来するのは、雨安居を過ぎ終わった諸比丘の常法である。彼ら雨安居を過ぎ終えた諸比丘は3カ月の終わりに臥坐具をたたんで、鉢と衣を持って、ヴェーサーリーにむかって出発した。客比丘と親しく挨拶を交わすのは諸仏・世尊の常法である。

と記されています。

雨安居といえますのは、お坊さんたちが雨季には遊行しないで、一個所に3ヵ月ないしは4ヵ月定住して、ひたすら修行に励むこととございます。ガンジス河流域地方は雨季には河が氾濫してあたり一面が海のようになってしまいますので、物理的に遊行できないという理由もございます。

ここには「世尊に会うために到来するのは、雨安居を過ぎ終わった諸比丘の常法である」とか「客比丘と親しく挨拶を交わすのは諸仏・世尊の常法である」とされており、今の場合夏安居の後なのでこれは「夏の大会」とよばれます。「だいえ」は「たいかい」と書きます。多くの人たちが集まることとございます。この大会は雨安居に入る前にも行われます。これは「春の大会」とよばれます。そしてこれらを行うのは「諸仏の常法」とされています。諸々の過去の仏たちやその弟子たちも行ってきた行事を、今の釈迦牟尼仏やその弟子たちも行っているということとございます。

この大会は決して単なる儀礼として行われたものではありません。必要があって行われたものがございます。お坊さんたちの戒律は決して倫理道徳として定められたものではありません。れっきとした法律でありまして、法律ですからこれを犯すと先ほどの波羅夷罪のように処罰されます。ところがこの法律は先ほども申しましたように、犯罪が起こるその都度その都度に随犯随制されましたから、日本の刑法のように初めから体系だって制定されているものではございません。出たとこ勝負で、いつ新しい条文が制定されるかわからなかったわけとございます。しかしお坊さんたちはこれを犯すと処罰されるのですから、その新しく制定された法律も含めてすべてを知っていなければなりません。しかしインターネットやテレビは愚か、このようなことを文字にする習慣がない、ペーパーさえ発明されていない、今から2,500年も前のインドのことですから、情報は口から口に伝えるしか方法はありません。

そこで全国各地にあるお寺の代表者たちが、1年に2回、雨季に入る前の春と、雨季が終わった後の夏に釈尊のところに来て、新たに制定されたり改訂されたりした法律に関する最新情報を仕入れるという習慣ができたわけとございます。代表者たちはこれをそれぞれのお寺にもって帰って、月に2度、満月と新月の日に、その寺のサンガに所属するお坊さんが全員出席してその確認会を行いました。これに欠席すると法律で処罰されました。それが**布薩**という行事とございます。このような方法で法律はすべてのお坊さんに周知徹底されたわけとございます。

というような事情からも釈尊は地方の辺鄙なところには行けません。もし釈尊が辺鄙なところに行かれると、全国に散らばっているお坊さんたちが集まることができないからです。そこで釈尊の行動範囲は必然的に仏教中国に限定されたわけとございます。

遊行と雨安居

ところで一般には、**釈尊は一所不住の旅暮らしに一生を終えられた**と考えられているようですが、しかしそのようなことはありません。ジャイナ教や遊行者と呼ばれるインドの他の宗教では、遊行そのものが修行でしたが、仏教の遊行は大会に参加するなどの目的をもってする出張旅行のようなものでした。したがって2ヵ月を越すような長期出張は勧められていなかったわけですが、釈尊も雨期の4ヵ月とその前後にはお寺の修繕とか、衣替え、そして春の大会と夏の大会がありましたから、雨季を中心とした前後9ヵ月くらいは雨季を過ごされる場所に釘付けになっておられました。したがって自由に動ける期間は1年のうちの3ヵ月くらいしかありませんでした。雨季を過ごされた場所がその年の釈尊の活動の主舞台であったわけですが、「年表」ではそのため、雨季の期間には網を入れてそれとわかるようにしてございます。

要するに、釈尊が何歳の年の雨季をどこで過ごされたかが判れば、釈尊の一生のグランドデザインを描くことができるということになります。ですからスリランカでは古い伝承を元に、成道何年の雨安居をどこで過ごされたという「雨安居地伝承」なるものが作られました。しかしこれは原始仏教聖典によったものではありませんので、われわれは採用しておりません。

この釈尊の雨安居地を調べてくれたのが**岩井昌悟**さんです。この研究に参加して下さったときは岩井さんは東洋大学の大学院に在籍中でした。この研究が立ち上がった2年後の1994年の2月でありました。今は東洋大学の教授です。

その外に私たちは、これは**私森**が主に担当しましたが、教団すなわちサンガがどのように形成されたか、そしてサンガの年中行事や釈尊と仏弟子たちの毎日の暮らしはどのようなものであったかを調べました。いわば釈尊や仏弟子たちの生活パターン、行動パターンの研究です。このパターンが判れば、釈尊や仏弟子たちの動きがだいたい予想できます。

またお経の中に登場する十大弟子と呼ばれる摩訶迦葉とか舍利弗・目連、阿難などの人物たちの個人史を知ることも年表づくりのメルクマールとなります。これがわかれば例えば阿難が登場するから、この経は少なくとも阿難が釈尊教団の秘書室長に就任した**釈尊54歳の雨季以降**であるとか、舍利弗・目連は釈尊より先に亡くなりましたから、彼らが登場すれば、それは**釈尊の77歳の雨季よりも前**であろうといった見当がつくわけですが、このようなことを**本澤綱夫**さんと私が協力しあって行いました。

本澤さんは東大の経済を卒業された後会社勤めをされて、学生時代から坐禅に親しまれていたということもあって、定年退職と同時に大学院の私の教室に入ってこられました。本澤さんは私よりも年上ですが、私の弟子ということになります。そしてこの研究に参加していただいたのは、岩井さんが大学院在籍中にドイツに留学しましたので、そのピンチヒッターとして入っていただいたのがきっかけです。平成10年のことですからもう**21年**になります。

以上「年表」の70ページ、71ページを中心にお話いたしました。

中村先生や水野先生はこういうことをすっ飛ばして、「釈尊伝」とか「釈尊の生涯」という書物を書かれたわけですが、実はすっ飛ばされた部分にはこのようなりアルな釈尊と仏弟子たちの活動がぎっしりと詰まっているわけですが、お家に帰られたら「年表」をざっとでも一覽していただきますれば、まさしく人間そのもののお釈迦さまや仏弟子たちが生き生きと活動しているのがおわかりになると思います。

コンピュータ

そろそろまとめに入りたいと存じます。

そもそもこの研究は**12,000 経**ほどの原始仏教聖典や、その他にわれわれは**B 文献**、**C 文献**と呼んでおりますが、後の時代にスリランカやタイ、あるいは中国などで作られた文献も加えて、これらを詳しく読んで、ここに記されている人物とか、場所とか、経の概要とかの情報をコンピュータに入力する作業から始まりました。今スクリーンに出ておりますのが、そのフォーマットでございます。もしコンピュータ時代が到来せずに、昔のようにこれらを1枚1枚カードに取るという方法では、われわれの研究は成立しませんでした。この小さく見える**12,413**がA文献のデータ数でございます。このほかにB文献には**2,077**、C文献には**545**のデータが登録されています。

このようにこの研究は12,000のお経をデータベースとして蓄積して、これをもとに進められたわけでございますが、**有意味**な情報が含まれているお経はこのうちの10,000経ばかりですので、われわれは10,000経ばかりの原始聖典を材料に研究したと申し上げたわけでございます。そのなかで『年表』に反映されているのは、そのなかの**6,000 経**ばかりです。これはわれわれの頭のなかでその年代推定の処理がなされました。その記録が「年表」の20ページ、21ページに掲げました**研究ノート**の(1)から(17)まででございます。

残りの**4,000 経**は、現時点では「あるとき」「その時」が釈尊の何歳のどの季節のものか特定できていないお経でございます。しかし特定できなくとも例えば釈尊の46歳の雨季の後から77歳の雨季までの間であろうなどという、ある幅をもったぼんやりした推定なら可能です。

方法論としては6,000経と同じなのですが、これはコンピュータの機能を利用して処理いたしました。このコンピュータ関係の担当者が**石井照彦**さんでございます。石井さんも花園大学を卒業してから会社勤めをしておりましたが、会社を辞めて大学院生として私の教室に入ってきました。その後この研究に参加してもらったわけですが、石井さんがもっとも遅くて、それは今から13年前でした。今は中央学術研究所の開祖顕彰資料室の室員をしております。

なおこの4,000ばかりの経は『年表』には反映されておりませんが、「総覧」にはすべて収録してございます。したがって「総覧」に収録されているお経の数はほぼ10,000ということになります。

共同研究

以上のようにこの研究は共同研究としてやってまいりました。私たちのなかには1人として衆に秀でた才能をもっている者はおりません。凡庸なものばかりでございます。そこでそれぞれが役割分担をし、足りないところを互いに補い合いながらやってまいりました。そのために私たちはこの28年の間、原則として月に1度定例研究会を行って意思を疎通しあいました。少なくとも250回くらいの研究会をやったのではないかと思います。

なおこの研究会のメンバーはいわば身内で固めているわけでございますが、共同研究のチームワークを保つためには身内だけがよいという判断をしたものでございます。またそのチームワークを保てたのは研究会の後に場所を変えて、徳利やビール瓶を傍らにして行う、2次研究会にあったと思います。自慢ではありませんが、250回の研究会の後のこの2次研究会はおそらく1回も欠かしたことがないと思います。こういう面でもたいへん精進努力したわけでございます。

そしてこのような努力の結果として、「年表」と「総覧」ができ上がったわけでございます。

まとめ

以上、私たちの研究についてお話させていただきました。本日はその完成報告会ということで、

私たちの釈尊伝研究会は形式的には今日で解散いたします。

しかし「年表」や「総覧」の生のままでは一般の人にはお判りいただけないし、仏教独特の難しい術語を平易な日本語にすれば、即わかりやすい伝記になるわけのものでもないと思います。やっぱり今までお話してきたような、それぞれの事績の背後にあるものも書き込まなければ説得力のある内容にはならないと思います。そしてこのような釈尊の伝記ができたときこそが、この研究の完成というべきかもしれないと思直しました。私は老齢ですから、その時間はなかろうとあきらめておりましたが、やっぱりこれは私自身がやらなければならないと決心いたしました。まだ構想さえできておりませんが、この書物は「釈尊教団形成史と釈尊の生涯」というような題名になるのではないかと思います。

また当初の計画では「年表」には人名・地名索引をつけ、「総覧」には**経典索引**をつける計画でございました。しかし時間に追われてこれらを作ることができませんでした。ですから近い将来にこれら2つの索引を作らなければなりません。またそれ以前に、「総覧」については十分な校正さえできておりません。索引を作る過程で誤りも発見されてくるでしょうから、「総覧」については将来に「改訂版」を出す必要が出てくるのではないかと考えております。

また「年表」に対しましても「総覧」に対しましても、厳しいご批判、ご叱正をいただきたいと思っております。そしてそれにはきちんとお応えして、訂正すべきところは訂正していかねばなりません。したがって報告書としての「モノグラフ」も後1、2冊は出さなければならないであろうと考えて、研究所にはそのようにお願いをしております。

また私自身があまり外国語ができませんので、論文のすべては日本語ですし、この「年表」も「総覧」もすべて日本語です。もしこれらが日本国内で評価されるものならば、ぜひ外国語に翻訳していただく措置も講じなければならないと考えております。

なお今までのご報告からもお判りいただけたかと思いますが、私たちが材料といたしました原始仏教聖典に登場する釈尊は、ブックサーティのエピソードではブックサーティが自分が対話している人がブッダとはわからずに「友よ」と呼びかけたとされていますし、王舎城の人々が最初に釈尊に会った時には、釈尊は弟子のウルヴェーラ・カッサパという人と一緒にいましたので、人々はどちらがブッダかわからなかったとされています。またお釈迦さまには喜怒哀楽もありまして、これがブッダかと疑いたくなるくらいの普通の人間で、立派ではあるけれど、まさに**隣のおじさん**という感じです。日本仏教の仏さまは阿弥陀仏や毘盧遮那仏、久遠実成仏などで、本堂にデンと収まっておられて親しみやすいとはいえません。

一方の今お話したお釈迦さまはまさしく親しみやすい仏さまですが、日本仏教ではこのお釈迦さまはないがしろにされている傾向がございます。まさしくお釈迦さまは**ホットケさま**なのです。私たちのこの研究がきっかけになって、日本人にもお釈迦さまが親しまれるようになればよいと願っておりますが、そのための活動もやっていかなければならないと考えております。

ですから課題は山積しているわけでございます。研究会は会としての**組織的な活動**は終了いたしますが、残務処理のための**形式的な研究会**は残さざるを得ません。これからは**メンバーの一人一人は独立して自由に活動**して行こうと話しております。皆さまには、今までどおりにご指導ご鞭撻を賜りますようお願いいたします。

お伝えしたいことがあふれそうにございましてつい早口になってしまいました。さぞお分かりに

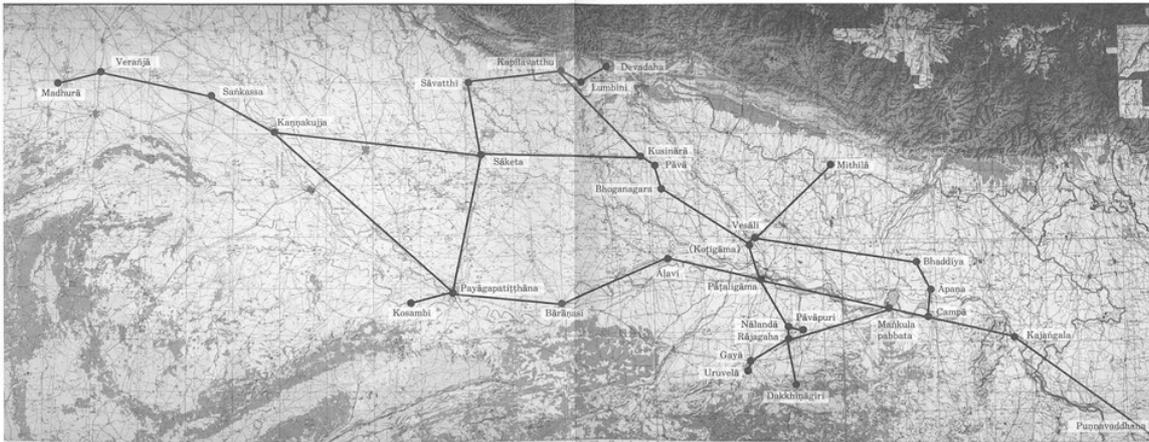
くかったことと存じます。いずれインターネットのホームページにこの報告会のことを掲載させていただくつもりであります。これをもってご確認いただければ幸いです。

これをもって私どもの報告を終らせていただきます。ご静聴まことに有り難うございました。

添付資料

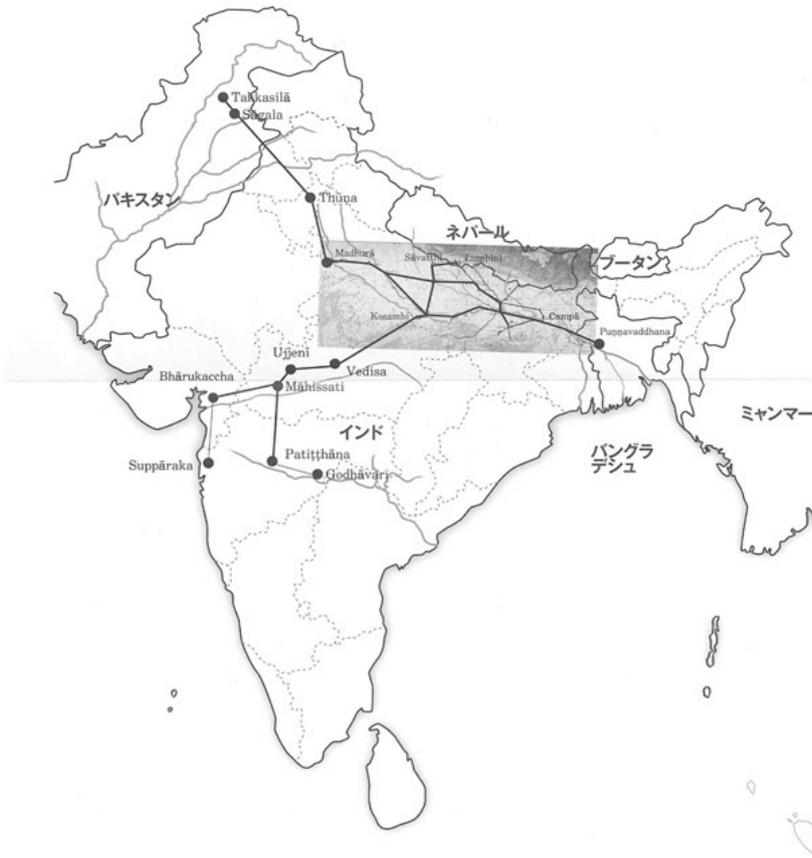
地図1：仏教中国地図（【完成地図】-②）

【地図Ⅲ】-②



地図2：インド全域地図（【完成地図】-①）

【完成版】-①



註：上記地図は「モノグラフ」第20号（2015年11月）に掲載した【論文26】「原始仏教時代の通商・遊行ルート」に付けた略地図である。